

## 麻薬・外国人労働者・貧困： アメリカと中南米の一側面

細野 昭雄

わが国をめぐる国際関係のなかで、日米関係は最も重要な領域の一つであるが、その相手国についての日本の理解は、アメリカの日本に対する理解と同様、まだかなり不完全なものであるとの指摘が多い。

そうした状況が生ずる要因の一つに、両国における主要な関心事が大きくずれているような場合がある。例えば、麻薬の問題がその一つである。日本ではほとんど社会問題化していないのに対して、アメリカでは緊急に解決を要する問題である。そのためそれがアメリカの国際関係にも大きな影響を与えていることを、遠く日本からアメリカをみる場合、十分理解できないような状況が生ずるのである。

まず、アメリカにとっての麻薬問題の大きさについては、最近行なわれたある調査結果が、その深刻さをよく物語っている。それによれば、アメリカ社会にとって麻薬の国内での取締りや、麻薬密輸入に対する対策費などを含め、600億ドルもの費用が掛かっているというのである。この数字がもし事実であるとするならば、麻薬問題はアメリカ社会の病理的現象を招くのみならず、経済的な観点からみてもいかに多大な負担を強いているかも理解し得るのである。

一方、中南米・カリブ諸国からのアメリカへの労働者の流入もすでに長い間にわたっているが、その勢いは決して衰えてはいない。すでに、現在正式なアメリカ市民で中南米またはカリブ諸国からの移住者であったり、その子供である人々は200万人を超えると推定されているが、それに加えて500万人から1000万人に上る不法入国者が存在していると推定されている。これらの人々は、今や黒人と並ぶあるいは黒人を凌ぐアメリカ最大のマイノリティーとなりつつある。

麻薬の問題も労働者流入の問題も、アメリカと中南米・カリブ諸国との複雑な社会経済関係を背景としている。麻薬については、コロンビア等の諸国は、アメリカが国内で取締りを強化しなければ需要が減らず、それに対して供給源を絶つこと

は、現在の状況ではきわめて困難であると主張している。また、中南米諸国の農村の貧困や多数の都市の失業者の存在は、麻薬産業に依存しなければ生きていけない人々を、いわば雇用する形となっている。コロンビアだけに関してもコカインの取引は、毎年この国に10億ドルもの外貨をもたらしていると推定されているのである。今やコロンビアでは、いわゆる地下経済が非常に大きな規模に拡大してしまっているといわれている。

労働者のアメリカへの移住に関しても、中南米諸国の貧困の問題を抜きにしては考えられない。アメリカには低賃金の労働力に対する需要があり、中南米側には職を求める多数の失業者がおり、低賃金労働力の大供給源となっている。

以上の2つの問題と深く係わっているのは、すでに約8年も続いている中南米の累積債務危機である。国連の統計によれば、1981年から88年までの期間にわたる一人当たり国民総生産の成長はマイナスであり、しかも-6.6%にも上るものとなった。この結果、多くの諸国で国民一人当たりの所得水準は、1970年代半ば以前にまで低下したのである。また、低所得層ほど経済危機の影響を強く受けたこともよく知られている。ブラジルに関する統計によれば、最低所得層20%の人々の失業率は40%に達するといわれている。

このような低い成長率は、累積債務の利子支払いを継続するために、中南米諸国が輸入と成長率を抑制しなければならなかったことによるものである。しかしながら、それでも利子支払いを完全に行うには不十分であり、新たな資金の借入れを行わざるを得ず、累積債務額は、危機発生直前の1981年の2800億ドルから1988年には4000億ドルを超える水準となった。そして、最近利子の支払いの継続も困難となっている国が少なくない。これらは中南米にとっての累積債務の規模が、あまりにも大きかったことを反映するものである。

以上、断片的ながら中南米とアメリカをめぐる国際関係にいくつかの側面について述べた。これらは複雑にかつ密接に関連し合っている。アメリ

カという日本と最も重要な関係にある国は、中南米諸国との間で、上に述べたような複雑かつ困難な状況を反映した関係にある。このようにみると

き、日本とアメリカの関係を考える際にも、アメリカと中南米の関係を視野の内に入れて考える必要があることがわかるのである。

## ピラニアの骨までしゃぶった話

岡田 久美子

中流マナウスの上空から見たアマゾン川は、セルバの中に夥しい水が、ただワッと無秩序に拡がっているばかりだった。その昔、地形学の講義から得た「河川」の概念には、確か「川岸」というものがあって、水と陸とは一線が画されている筈であるのに、こゝには……それが無い。

世界中の河川流量の20%近くという、驚くべき水量を有するこの川は、また実に多種多様の生物をその懐に抱いている。例えば動物では、大は巨大魚ピラルクー、孳猛なクロコダイルに大蛇アナコンダ、小は水辺で幻想的な点滅を繰り返す無数の蛍まで。そしてあの殺し屋ピラニアも、その一員である。先年、私はピラニアの中でも特に狂暴の誉れ高いナツテリと、こゝアマゾンで親しく対面する機会を得た。

ゴム景気の衰退による凋落後、半世紀を経てフリーポートとして蘇ったマナウス。その港を離れた定員30人のクルーズ船は、古びてはいるが各キャビンにシャワー・トイレ付き（但、その水は直接川から供される）。しかもこの時は12人の乗客に対して、ガイド、クルー、コック、ボーイ等が総勢10人という贅沢さ。更にモーターボートを2隻牽引しており、ジャカレー（大鬼蓮）を見に行ったり、夜中に鱔狩りに出掛けたり、小さなゴム園を訪問したりと、スピードと小廻りが要求される時には、これに分乗することとなる。

ピラニア釣りの場合もまた然りで、ボートはパピルスに似た水草の茂る、細い水路の奥へと進む。水は茶色に濁って、川の中の様子は我々には皆目分らない。釣竿は、細い木の枝の先に糸と鉤を結びつけたただけのごく簡単なもの。餌は小さく切った牛肉を使う。そしてこゝでも既得の「釣」の常識はひっくり返された。先ず釣竿で、水面を思いつきパシャパシャ叩くのだそう。つまり、

好戦的なピラニアを吏に挑発するわけ。当りが来た時の竿の上げ方も要領が違わらしく、以前に鮎釣りの名人なる人が満を持して糸を垂れたが、獲物はゼロであった由。

南緯3度、青く広い空の下の、真昼の静寂——と、セアレンセ（インディオとオランダ人の混血）の船頭が、早速最初の1匹を釣り上げた。油壺の熱帯魚水槽で見たのとは違って、腹部の朱赤の彩りや金色の紋様がパッと鮮やかだ。体長も20cmを優に越えようか。さて、我々とはといえば、ツンと来た手応えでサッと上げているつもりなのに、いつも餌だけがきれいに無くなっている。それも、脂身部分は残して行くという芸の細かさ。感心ばかりしていないで、せめて1匹なりとと念じていると、グイと強い引き。今度こそはと掬うように竿を上げると、かかった！ 晶目もあろうが、大きい。しかし怖くて鉤から外せない。下手をすれば、指の1本ぐらいブラブラにされてしまうだろう。つくづく顔を眺めて新発見、ピラニアはひどい受け口なのだ。下顎が特に発達して大きく突き出し、その上にズラリと並んだ尖った歯、歯……。血の匂いを嗅ぎつければ、寄ってたかってむしゃぶりつき、遂に白骨にする迄は攻撃の手を緩めないという、あの歯だ。結局、このあと餌の牛肉を相当量振舞い、1時間ほどの間に1行6名で釣れたのはたった2匹。ガイドと船頭は2人でその数倍を、既に船底の箱に入れている。

本船へ戻ると、早速メスチゾのコックが皆の期待をこめた注目の中で、包丁捌きよろしく調理にかゝる。先ずは刺し身。醬油やチューブ入り山葵も先刻整えてある。白身であっさり、という印象で、幾らでも食べられそう。ライムを搾り、更に卵白を加えたピンガ（甘庶から作ったアルコール度の高い地酒）や、主食となるタピカオを炒めた